

ミニバスケットボール期における強化策とその普及の問題点

—一つの県の事例研究として—

コーチング科学研究領域

5009A043-1 佐々木 海

【第1章】 序論

世界における日本のバスケットボール競技レベルは高いとは言いがたい。オリンピックに至っては1976年モントリオールから30年以上出場を逃している。日本バスケットボール協会(以下JBA)では2002年に従来の強化体制を見直し、選手の育成強化のためにミニバスケットボールからの一貫強化育成システム・エンデバー制度を開始した。しかしエンデバー制度はJBAが作った強化策を各チームに伝える各都道府県バスケットボール協会、それを実施する全てのミニバスケットボールチームがJBAと同じベクトルに向かなければならない。果たして本当にその様になっているのだろうか。

【本研究の目的】

本研究の目的は日本バスケットボール協会のミニバスケットボール期における強化策を整理した上で、現在起こっている問題点を挙げることである。また、その普及の状況、及び普及方法の問題点を調査し、そこから見えてくる課題を見つけ出し、改善方法を提示することが目的である。

【本研究の方法】

研究は以下の手順で進める。

- ・文献調査を行い、幼少期におけるJBAの強化策の資料を収集し、整理する。
- ・X県ミニバスケットボール連盟副理事長、X県バスケットボール協会強化普及委員長、X県バスケットボール協会所属のミニバスケットボールチームの指導者にインタビュー調査を行う。
- ・X県バスケットボール協会に所属するミニバスケットボールチームの指導者にアンケート調査を行う。

【第2章】 一貫指導システム

研究指導教員 倉石 平 准教授

多くの研究によって一貫指導システムの有効性は証明されてきている。JOCはスポーツ振興基本計画における到達目標として、各中央競技団体が指導理念や指導内容を示した競技者育成プログラムを作成し、競技者に対し指導を行うトップレベルの競技者を組織的・計画的に育成する一貫指導システムを整備するよう進めてきた。

第3章【JBA強化策】

JBAは平成14年に「JABBA 変革21」を策定した。「強化」、「育成.強化=エンデバー=一貫指導システム」、「指導者育成」の3本柱を三位一体とした20年構想を立ち上げた。3本柱の円滑な推進活動を図るため、「育成・強化」をはじめ、強化方針の徹底的な見直しを推し進めている。しかし強化策の中にU-12、つまりミニバスケットボール期に関する記述はほとんどない。

第4章【幼少期トレーニング】

梅崎らは神経系が最も発達するゴールデン・エイジ期(9~12)歳を一生の中で最も大切な時期と捉えており、この時期の適切な指導が完成期(20歳前後)に成果をあげるための取り組みとして重要であるとしている。また、コーディネーショントレーニングは幼少期のトレーニングの中で取り入れやすい練習メニューである。西はプレ・ゴールデンエイジにおけるトレーニングのポイントの点で多面的な運動を通してのコーディネーション習得が中心だという考えを示している。JOCは平成12年度からプロジェクト中央班にIT活用検討班とコーディネーション班を設置して研究を続けている。そのコーディネーショントレーニングはバスケットボール界でも重要性を認識し始めた。2010年にJBAから配布されたフレッシュ・マイクロミニバスケットボール指導

マニュアルの練習内容は、コーディネーション能力をひき出すコーディネーションエクササイズを中心としたメニューで構成されている。ここからもJBAが重要性を認識し出したことがわかる。

【第5章】インタビュー調査

インタビュー調査によってリーダーシップの不在、JBAの組織の曖昧さ、強化策普及の伝達経路の不備、強化策の目的の欠如、寄せ集めのカリキュラム等の問題が明らかになった。

【第6章】アンケート調査

アンケート結果により、以下のことが明らかになった。エンデバー制度を認知しているのは80%を超えて広く認知されていると言える。フレッシュ・マイクロミニバスケットボールの入手率は53.1%となったが、全ての指導者への配布を目的としている点から考えれば普及はあまりできていないと言える。指導書を練習に取り入れたのは約70%を超え、有効性についても約60%が肯定的に捉えており、指導書の有効性はミニバスケットボール指導者においては高いと言えるだろう。コーディネーショントレーニングの内容まで認知していたのは約40%、コーディネーショントレーニングを実際に取り入れたのも約40%に留まり、コーディネーショントレーニングの普及はあまりできていないと考えられるが、有効だと答えたのは80%を超えたことから、バスケットボール指導者の中での認識は高いと言えるだろう。JBAからの指示については90%以上がないと答えており、JBAからミニバスケットボールチームに直接の指示はほぼないと言えるだろう。

【第7章】考察

JBAの強化策は理念を表したのみであり、具体的な計画は本研究の結果から見えてこなかった。日本サッカー協会はU-6からU-12までの2歳刻みの指導ガイドライン、指導指針を提示している。JBAも細かな指導指針を組み込んでいくべきである。普及ではJBAの組織自体が明確ではなく、その結果伝達経路に不備が生じており、JBA、都道府県バスケットボール協会、ミニバスケットボールチームの連携が取れていないとが考えられる。

【第8章】結論

ミニバスケットボール期における強化策は発掘、育成、指導者育成、全ての面で多くの問題が明らかになった。それぞれで人的資質、物的資質、指導資源、マネジメント機能に欠陥があると言わざるをえない。JBAはシステム構築と普及に必要な情報伝達システムの確立に力を注がなくてはならない。本研究で発掘、育成、強化という三位一体の強化策は不十分であることが示唆された。提言として、三位一体の強化策に支援を加えた4本の柱の構築を挙げたい。人的に可能ならば都道府県エンデバー、地区エンデバーまでJBAスタッフを派遣する。不可能であれば、どのようなエンデバー講習会だったかを詳細に報告させ、DVDや紙の媒体で改善方法を提示する。JBAは現状に甘んじているだけではない。実施、分析、報告、改良を行い、常により良い強化策を練り続けている。日本のバスケットボールを変えるために、JBA自身も変化を遂げようとし、強いリーダーシップを発揮して、目の前にある課題に挑んでいるのである。これからのバスケットボールのために、本研究がJBAの変革に少しでも助けになることを信じている。